

(3) 著者の探索は、判断の根拠としての光の現出の境界で終わっている。しかし、アウグスティヌスの本来の問いは、むしろそこから始まるのではないか。in cuius oculi mihi quaestio sum, et ipse est languor meus.

### 水落健治氏

初期アウグスティヌスが、信仰と理性との関係をどのように考えていたか、という点について質問させていただきたい。質問は第3篇第3章「探求の二重の道」に関わる。

片柳氏は、同箇所『秩序論』II.5.16, II.9.26 ff.をとり上げ、「時間的には権威が、しかし事柄においては理性が先行する」(II.9.26)という語を中心に据えて、信仰と理性の問題をいわゆる「知解を求める信仰」の枠組みで理解しておられるように思われる(350~58頁)。だが『秩序論』では、信仰と理性とはむしろ「並列するふたつの道」として述べられているのではないか。(1)I.8.24では自由学芸が「学問を愛する人」を「真理の把握に対して……より整えられたものとなす」と称賛され、II.12.35 ff.で学問論が展開されているが、この記述は、「理性=学問」を信仰とは独立に肯定的に評価することなしにはあり得ないのではないか。(2)I.11.32でアウグスティヌスは、聖書を愛読してはいるものの「哲学」の語源を知らない母モニカを「知恵への愛において非常に進んだ」と述べているが、ここには、哲学(学問)によらず「信仰」によって「哲学の最高頂点」にまで至ったモニカと、哲学(学問)の道を一步一步進んで「頂点」に至ろうとするアウグスティヌスやリケンティウスらとの対比があるのではないか。

この問題は、本書では十分論じられていない問題——初期アウグスティヌスが『音楽論』など自由学芸に関する書物を執筆した動機をいかに捉えるか——に関わると考えられる。

著者コメント————片柳栄一

拙書『初期アウグスティヌス哲学の形成』の書評会での質問に個別詳細に答える紙数がないので、この書の意図、方法などを説明しながら、簡略に答えたい。

本書の意図は、アウグスティヌスのミラノでの回心をめぐる百年以上にわたる論争に一つの新しい視点を与えようとするもので、彼の回心は「第一の探究する自由」の発見とこの自由の内に入って行く事への決意であったとするものである。彼の新プラトン主義との出会いの核心は、判断の根拠の超越性の理解であり、それを彼はロマ書 1.20 と重ね合わせて理解した。このようにして彼は「自らに超越する神」の前に心から跪きえたと同時に、宗教的探究への自らの無力さを突き付けられ、道としてのキリストの意味を明らかにされ、探究における敬虔という宗教的在り方を開示されたと考えられる。宮内先生、水落さんからは理性の道と信仰の道は別なものとしてあったのではないかと問われたが、判断において超越する神の開示は、自らの無力さを自覚させキリストへの信仰を促す力となっており、逆にこの信仰が超越的なものの理性的探究を促すという相関的構造をなしていると思う。加藤武先生ご指摘のように、「第一の探究する自由」とは、本来の問いが始まる探究場の発見なのであるが、探究という途上の事柄が、人間にとっては、全てのことがそこから始まる第一の事柄であるとわかるという意味では、原初的な場の発見でもあると思う。私が「第一の探究する自由」という言葉にこだわってきたのも、単に文献学的興味からではなく、神が隠れているともいえる現代的状況の中での、問い求めるという宗教的敬虔の在り方を自分なりに探りたかったからである。岡部さんとは *probabile* をめぐって論議してきたが（「真理への絶望」 p.113 は誤訳であるとの痛い指摘には感謝している）、拙著 324 頁以降に記したように、アウグスティヌスは、フレーデが言うような意味でのドグマ的懷疑主義者の用いる *probabile* の含意するところを、積極的に利用して、信仰の構造との類似性を示唆しているように思う。森先生の質問の、拙書の最後になぜ初期著作（初期は 396 年以前とする）でない『創世記逐語注解』に基づく「創造における *conversio*」論をもってきたのかということであるが、379 頁にも書いたように、初期著作の範囲を超えたこの議論が、「第一の探究する自由」の問題を、存在論的に基礎付け、深めていると思われたので取り上げ、「第一の探究する自由」の発見が、彼の生涯の思想を規定したものであることを言いたかったのである。